

平成 22 年 5 月 18 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720235

研究課題名（和文） 英国におけるトラストの博物館設立活動に関する人類学的研究

研究課題名（英文） An Anthropological Study of Trust Activity in Founding Museum in Britain

研究代表者

塩路 有子（SHIOJI YUKO）

阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70351674

研究成果の概要（和文）：本研究では、英国コッツウォルズ地域のコートバーン博物館を調査した。同博物館は英国の手工芸文化を展示し、トラスト員が博物館経営を行い、ボランティアが受付や教育プログラムに携わる。博物館開館までの経緯と関わった人々、トラスト員のソーシャルネットワークによる資金活動や人材発見、開館後のボランティアの活動という「チャリティ」精神にもとづいた活動やネットワークづくりが博物館を介した自文化表現を可能にしていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study focused on researching the Court Barn Museum in the Cotswolds, Britain. The museum presents English culture of arts and crafts and it has the trustees committing in management of the museum and the volunteers involving reception works and educational programs. It was investigated that the activities and networking based on the “charity” spirit such as the process of founding museum and the people who were involved: trustees’ fund raising by their social network and volunteers’ activities made the museum possible to represent their self-culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	0	0	0
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学

## 1. 研究開始当初の背景

英国では 1980 年代後半から博物館などの文化遺産産業が隆盛し、文化遺産の保全と活用を通じたアイデンティティの再認識と再形成が全国で起きている。このような文化遺

産産業の隆盛の基底には、自らの町の文化遺産に誇りをもち、それらを博物館として公開しようとする各地の有志によって結成されたトラストの活動が存在している。この動きは、2000 年以降、英国デザインを室内装飾

品で表現した常設展示「プリティッシュ・ギャラリーズ」(BG)を開設したヴィクトリア・アルバート(V & A)博物館など中央の同産業にも反映された。

研究代表者は、2004 年度科学研究費若手研究 B「英国の文化遺産産業における『自文化』表象に関する人類学的研究」において、国・地方・町レベルの博物館に関して「自文化」表象の内容と過程を文献とフィールドワークにもとづき調査研究してきた。前述の V&A 博物館の BG 展示については、展示を観察・記録し、その過程に携わった学芸員、デザイナー、展示技術者などに聞き取り調査を行い、展示内容や方法をめぐる議論や組織運営上の問題点など、その過程には複雑な試行錯誤があったことがわかった。地方レベルとして調査したコッツウォルズ地域のチェルトナム・アートギャラリー博物館では、V & A 博物館の BG 展示に影響を及ぼしたとみられる展示方法がすでに確立されていたことも判明した。さらに、町レベルでは、同地域のチップング・カムデンで進展している手工芸ギルド・トラストによる博物館開設活動に着目し、その活動に携わるトラスト員、建築家、デザイナーに聞き取り調査を行い、同トラストが V&A よりも長い年月をかけて開設を検討していたことがわかった。その活動は、トラストの内外の人々や組織との社会関係の間で発展を続けているようだった。

以上の調査研究から、国や地方よりも小さな社会集団でありながら、博物館の設立に取り組むトラストの活動が、英国における現在の文化遺産産業の隆盛の底流にあることを認識した。そこで、2004 年度の科研若手研究 B を発展させる形で、あえて小さな社会集団であるトラストに焦点をしばり、博物館設立に関する活動を詳細に調査分析すれば、英国においてなぜ人々が文化遺産を保全するだけでなく、博物館という形で公開することに熱意をもつのか、その中でのトラストの役割は何なのか、「自文化」表現の過程とその意味について、より明確に把握できると考え、本研究を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、英国において博物館の設立をめざす町レベルのトラスト活動に焦点をあて、展示内容や方法だけでなく、設立場所、資金、社会関係の構築など多様な側面からその活動を詳細に分析することで、英国の文化遺産産業隆盛の根底にあるトラストの役割と同産業を通じた「自文化」表現の過程とその意味を具体的に明らかにすることである。

(2) 本研究の意義は、英国におけるトラストの博物館設立に関する活動に焦点をあてる

ことで、文化遺産を活用した「産業」を通して形成される「自文化」表現の内容と過程をミクロ・レベルで明らかにし、現代消費社会における文化遺産の活用と文化的・民族的アイデンティティの研究に新しい知見を提示することにある。また、従来のエスニック・アイデンティティに関する人類学的理論を新しい観点から再考することができると考える。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、基本的に研究代表者が 1 人で行い、文献調査と現地調査を実施した。2007 年度は、文献調査と数週間の現地調査を行った。また、国立民族学博物館共同研究会において 2 つの研究発表を行い、他の研究者からコメントや示唆を得た。

2007 年度に開館した研究対象の博物館に関して、展示内容のビデオカメラやカメラによる記録、手工芸ギルド・トラストの活動とトラスト内外の社会関係に関する聞き取り調査を行った。

本来の研究終了年度である 2008 年度は、研究代表者が産休のため、本研究を一時休止した。

2009 年度には、研究代表者が所属大学の国外研究の機会を得たことで、2009 年 4 月から 2010 年 3 月まで約 1 年間現地に滞在しながら調査研究を行った。そのため、現地のコミュニティに関して長期のフィールドワーク調査が可能になり、コミュニティの中でのトラストや博物館の位置づけを調べることができた。それらの研究成果は、テーマ別にとりまとめた(「5. 主な発表論文等」を参照)。

研究上の工夫としては、研究代表者は、これまでの研究調査を通して、同地域にインフォーマントと研究者からなる研究協力者のネットワークをもつため、現地調査に向けて彼らと連絡を取り合い、博物館の動向など現地に関する情報を事前に得ることができた。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

本研究で事例とした英国コッツウォルズ地域のコートバーン博物館は、2007 年に開館され、アーツ・アンド・クラフツ運動を中心に英国の手工芸文化を展示している。同博物館の 13 名のトラスト員が博物館経営に、約 40 名のボランティアが受付や教育プログラムに携わる。開館まで 10 年以上かかった過程には、空間的かつ資金的な問題があり、トラストはそれらを町内外の人々や組織との関わり、トラスト員のソーシャルネットワークによって、ひとつずつ解決していった。言い換えると、開館までの間に「チャリティ」としてのネットワークを構築し、それを最大限に活用したのである。

英国におけるトラストのような「チャリティ」は、地元のニーズに応えるため、ほとんど財源をもたないような小さな集団から数百万ポンドの予算規模の有名なチャリティまで多様である。チャリティといっても、病人や老人に対する奉仕的なものばかりではない。町の歴史や文化遺産の保存協会、環境保護団体もチャリティである。その規模や目的に関わらず全てのチャリティは慈善的な目的をもち、政府や商業的関心からは独立している。

2010年1月現在、英国には約18万のチャリティが活動し、収入規模の小規模なものが全体の77%を占めている。町村レベルのものがほとんどと考えられるため、人々の生活に密接に関わっていることが多い。

コートバーン博物館は、ボランティアの協力なしには人的にも経済的にも成り立たない。彼らは、平均すると週に1度以上定期的に博物館にボランティアに来る。彼らは退職して間もない60歳代前後である。いずれも経済的な余裕があり、自ら選んでこのボランティアをしている。現在この町とその周辺町村に住んでいるのは10人で、移住して3年以内の人が多く、彼らはロンドンやバーミンガムなどの都市から移住してきた人々である。約半数が、他の博物館で同じようなボランティアや、町の高齢者を手助けするチャリティでボランティアをしている。また同町の複数のアソシエーションに参加している人も多い。

コートバーン博物館でボランティアをする理由としては、「他のボランティアと友達になれる」や「来館者への説明や彼らの話を聞くのが楽しい」というソーシャルな側面と、「ここに来ると毎回何か新しいことを学ぶ」や「美術史や手工芸文化について学ぶことができる」という学びの側面がある。とくに、友人づくりの場として捉えているのは、この町に移住して数年以内の人々である。他のボランティアと友人になることで、町の他のアソシエーションに参加したり、仲間同士で食事を介したソーシャルな付き合いをするようになる。また、彼らはボランティア活動をすることで「コミュニティに貢献することは大切だ」と述べ、そうすることで「コミュニティに連帯感を生み出す」や「コミュニティ精神を維持したい」と考える。彼らの多くは「コミュニティ」を重視し、そこに貢献する姿勢を示す。

以上の内容とチップング・カムデンにおける他のチャリティの詳細や手工芸ギルド・トラストとの関係性については「英国カントリーサイドのチャリティ 理想の居住地におけるソーシャル活動と『コミュニティ』の変化」(森明子編著『ヨーロッパ人類学の視座：ソシアルを問い直す』2010年秋出版予定

世界思想社)にとりまとめた。

このように、開館までのトラストの活動や開館後のボランティアの活躍のような「チャリティ」精神にもとづいた行動やネットワークづくりが博物館設立構想を実現し、博物館を介した自文化表現を可能にしていることが明らかになった。

また、同博物館を介したアイデンティティ形成と観光との関係は、本研究期間終了後の2010年4月に同博物館が開始する「友の会」の活動を通してより顕著になると考えられる。残念ながら、本研究では期間中にその点は具体的に明らかにすることができなかつたため、今後の課題としたい。

## (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は、これまで日本の人類学においてほとんど研究されてこなかった英国のトラストに関する文化人類学的研究であり、日本におけるヨーロッパの人類学的研究に新しい知見を提供することができる。これまでの博物館に関する人類学的研究は、世界的にもマイノリティの人々の文化を表象する博物館を対象としたものが多い。本研究は、人類学的研究が主な理論的議論の対象としてきた国民文化の生成とアイデンティティに関する側面を、博物館の設立によって表現されるマジョリティの人々の「自文化」という角度から検討したことで新しい視点を人類学に提示することができる。英国では、文化遺産保全意識が強く、文化遺産観光を通じた地域振興を実現している。文化遺産の活用において最先進国である英国の文化遺産産業をめぐるトラストの活動を分析したことで、世界的に模索されている文化遺産の活用という課題にミクロ・レベルの成果から貢献することができる。

## (3) 今後の展望など

今後の展望としては、2004年度科学研究費若手研究B「英国の文化遺産産業における『自文化』表象に関する人類学的研究」で明らかにした、国と地方レベルの博物館での成果と本研究の町レベルの博物館設立活動に関する成果を比較検討して考察を加え、論文として1つにまとめる予定である。

本研究で明らかにしたトラストの活動と役割についてさらに追究し、トラストに参加する個人のレベルでソーシャルネットワークに関して明らかにしていきたい。

英国内のスコットランドやウェールズでの文化遺産産業の動きを把握して、と比較検討していく予定である。

研究の成果として英語論文を発表し、研究対象地域への現地語での貢献と本研究のよりグローバルな展開を目指す。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

発表者：塩路有子

発表表題：「博物館における『新神話』 英国ヴィクトリア・アルバート博物館の英国展示をめぐって」

学会名等：国立民族学博物館共同研究会「会社神話の経営人類学」

発表年月日：2007年6月17日

発表場所：国立民族学博物館（大阪）

発表者：塩路有子

発表表題：「ツーリズムとコミュニティ：『外からのまなざし』を内包する英国カントリーサイド」

学会名等：国立民族学博物館共同研究会「ソーシャル概念の再検討：ヨーロッパ人類学の問いかけ」

発表年月日：2007年6月30日

発表場所：国立民族学博物館（大阪）

〔図書〕(計2件)

塩路有子 2010年「ウチとソトの境界意識と『より良い暮らし』の実現」藤木庸介編著『生きている文化遺産と観光：住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版社 pp.70-90。

塩路有子 2010年(編集中)「英国カントリーサイドのチャリティ 理想の居住地におけるソーシャル活動と『コミュニティ』の変化」森明子編著『ヨーロッパ人類学の視座：ソーシャルを問い直す』世界思想社。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

塩路 有子 (SHIOJI YUKO)

阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70351674

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし